

国内経済情勢

概観

6月の生産、出荷は、前2ヵ月著伸のあとさすがに伸び悩んだが、ならしてみればかなりの増勢が続いている。これは、一方で軽微な在庫調整が行なわれているものの、設備投資、個人消費などの国内最終需要が堅調を続けているほか、輸出も相当な増加基調をたどっており、総需要の増勢には衰えが生じていないためとみられる。かかる情勢を映じ、生産者製品在庫率は比較的低水準のまま大勢横ばい傾向をたどり、商品市況、卸売物価も保合いぎみに推移している。

金融面をみると、企業の借入れ態度には先行きの金融情勢に対する見通しの変化などから、ひところみられたひっ迫懸念がしだいに薄らぎつつある。貸出金利の上昇は一巡ぎみとなり、公社債市況も反騰に転じている。

以上のように、国内における需要は依然として根強いものがあるが、一方、国際収支は顕著な好転を示している。米国の急速な景気上昇を背景とする輸出の伸長を主因に、貿易収支の黒字幅は月によりフレはあるものの急速な拡大を示し、貿易収支を季節調整した基礎的収支は、5、6両月とも1億ドルをかなり上回る大幅黒字を続けている。

生産は前2ヵ月急増のあと小幅続伸

鉱工業生産(季節調整済み)は、4月、5月と2

ヵ月続いて前月比それぞれ+3.3%、+2.8%の上伸を示したあと、6月は速報ベースで前月比+0.3%と小幅ながら続伸した。財別にみると、耐久消費財(乗用車、エアコンディショナー等)がかなりの増勢を持続したが、反面生産財は微減となった。

一方、生産と同様、4、5月に大幅な増加を続けた鉱工業出荷(季節調整済み)は、6月(速報)前月比-0.3%の微減を示した。財別にみると、前月著増した船舶の大幅反動減から資本財がかなりの減少となり、また建設資材、生産財も伸び悩んだが、反面、耐久消費財は家庭用電気製品、乗用車等を中心に大幅に増加し、非耐久消費財もかなりの増加を示した。

生産者製品在庫(季節調整済み)は、6月の速報ベースで前月比+0.5%の小幅増加となり、製品在庫率指数(86.9)もわずかに上昇したが、このところ昨秋ごろの水準まで下げもどしたままの状態推移している。

設備投資動向をみると、一般資本財出荷が月々のフレはあるものの高いテンポの増加基調を続けていることなどから推して、増勢はあまり衰えをみせることなく推移しているものとみられる。企業の景況先行き観がひところより好転したことから、投資態度には一部で微妙な変化もうかがわれ、すでに中小企業などでは、既定計画の増額修正に踏み切った向きも散見されはじめている。先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節調整済み)の動きをみても、石油精製、電力などが

らの大型機械の受注が相変わらず高水準を続けているうえ、中小型汎用機種もあって、4、5月の平均水準は1～3月を2割方上回っている。

なお、労働力需給の引き締め基調にはさしたる変化はうかがわれないが、春季賃上げ交渉の高額妥結を映じ、このところ賃金の上昇が目だっている。

卸売物価は横ばい傾向を持続

最近の商品市況をみると、これまで軟調裡に推移してきた石油、木材、砂糖等で徐々ながら底値感が台頭している一方、5、6月にかけて根強い反騰傾向を続けてきた鉄鋼、繊維の主力商品は、一部を除き再び小幅の下落を示すなど区々の動きがみられるが、大勢としてはほぼ保合った状態で推移している。

主力商品が最近やや軟化しているのは、季節的事情に加え、輸出やメーカーの市況対策の先行きに多少の疑問をいだけ向きが流通段階にみられはじめ、大勢として慎重な手当て態度がとられていることが響いているものとみられる。ただ、末端需要が依然根強い動きを続けているため、先行きの需給関係に大きな引きゆるみが生ずるといった懸念はうかがわれず、目先市況が一段と下値を迫るような地合いにはないようである。

本行卸売物価は6月には鉄鋼、繊維の値上がりを主因に前月比+0.1%と反騰した。7月上旬は前旬比-0.1%と微落したが、中旬はその水準で保合うなど、このところ大勢横ばいぎみに推移している。

一方、消費者物価(東京)は、6月は季節商品の値下がりが大きく響いて前月比-1.4%と大幅下落を示したが、7月には食料、住居、雑費の値上

がりから前月比+0.6%と再び上昇した。

貸出金利は上げ一服、公社債市況は反騰

6月の財政資金は、租税、郵便貯金などの受入れが順調であった反面、地方交付税交付金や社会保障関係費などの支払がかさみ、また外為会計がかなりの払超となったため、月中受超額は222億円にとどまった(前年同月1,303億円の受超)。

しかし、銀行券は月中2,653億円の大幅増発(前年同月1,833億円)となり、月中平均発行高の前年同月比増加率は+17.3%と水準を高めた(5月同+15.7%)。これは、6月の月初、月末がたまたま週末に当たったという特殊事情も相当響いているほか、経済活動の拡大基調に目だった変化が生ぜず、とくに個人消費が堅調を続けていることを反映したものとみられる。個人消費の関連指標である百貨店売上高をみても、4、5月やや伸び悩んだあと6月には大幅の増加を示している。

前記のような財政資金、銀行券の動きから6月の市場資金不足は多額に上り、これに対処して本行は政府短期証券の買戻しを行なったが、総じて市況は引き締め基調を続け、コール・レートも月初の月越物に続き、下旬には翌日物、無条件物ともそれぞれ日歩1厘上昇した。

更月後も銀行券の根強い増勢基調にさして衰えがみられず、一方財政資金は、国内米予約概算金が支払われたものの、租税を中心に引揚げ傾向が強くなり、このため市況は依然引きゆるむことなく推移している。

6月の全国銀行貸出増加額は、3,269億円と前年同月を28%方下回った。業態別には都市銀行がかなりの減少を示したほか、地方銀行や長期信用銀行などの貸出も程度の差はあるにせよ前年水準以下にとどまった。また中小企業金融機関の貸出

も、総じて増勢鈍化がみとなっている。

銀行の融資態度には一部に微妙な変化がうかがわれなくてもない。また、企業の借入れ態度にも、先行きの金融情勢に対する見通しの変化などから、ひところみられたひっ迫懸念がしだいに薄らぎつつある。このような情勢を映じて、全国銀行貸出約定平均金利はすでに上げ一服模様となっている。

公社債市況も、買手側金融機関の先行き金利低下見越しによる購入意欲の高まりなどから、このところ上場相場、店頭気配とも反騰傾向を続けている。

貿易収支は大幅黒字を持続

6月の国際収支は、貿易収支が季節的事情から大幅黒字となったうえ、長期資本収支も長期インパクト・ローンの流入増、外債の発行増加などから受超に転じたため、総合収支の黒字幅は181百万ドルと目だって拡大した。なお金融勘定では、為替銀行の対外ポジションが買持輸出手形の増大を主因に大幅な改善を示し、外貨準備も57百万ドル増加した(月末残高1,976百万ドル)。

季節調整後の貿易収支の動きをみると、輸入は落ち着き傾向を続けたものの、輸出が異常高を示した前月に比べ相当減少したため、黒字幅は前月をかなり下回ったが、大幅な黒字基調にある点は変わりなく、4～6月をならしてみると235百万ドルの黒字と1～3月の水準(同137百万ドル)を大きく上回っている。また貿易収支を季節調整した6月の基礎的収支は、前月に引き続き1億ドルをかなり上回る大幅黒字を示している。

6月の輸出は季節調整後でみると、船舶などの特殊要因もあって著増した前月を8.1%下回ったが、前年同月比では+22.2%と依然高水準を示している。このような輸出の好調持続は、直接、間接米国景気の急速な上昇による面が大きい。すなわち、米国経済は年初来2四半期にわたって年率9～10%の拡大を示し、これに伴って米国の輸入は前年同月比で年初の15%増から5月には28%増へと急増している。このためわが国のみならず、西欧、東南アジア諸国などの米国向け輸出も顕著な増加を示しており、わが国のこれら地域向け輸出が最近好調を示しているのも、かかる事情に基づくところが大きいとみられる。先行指標である輸出信用状接受額(季節調整済み)の動きをみると、5月著増(+8.1%)のあと、6月は鉄鋼、化学製品等の停滞が響いて前月比-4.4%と伸び悩んだが、7月にはいつてからは増勢を取りもどしている。

一方、6月の輸入は季節調整後の前月比で-2.6%の減少となり、前年同月比でも+3.2%と低めの水準にとどまった。これには化学品、非鉄、雑製品等の一部品目につき、7月1日実施の関税引下げを当て込んで通関繰延べの動きがあったことも響いているが、主力の原燃料も、輸入素原材料への依存度の高い鉄鋼、石油等の生産財生産がこのところやや伸び悩んでいるため、総体として落ち着きぎみに推移している。このような輸入の落ち着き傾向は先行指標の動きにもうかがわれ、6月の輸入承認は季節調整後で前月を下回った。

(昭和43年7月30日)